



校長室だより

月立小学校 校長 村上克弥
平成30年6月29日
☎55-2260 第3号

教育目標

ふるさとに誇りをもち
夢と希望に満ちた
心豊かでたくましい児童の育成



～親子の絆～

ご存じの通り、私は毎朝大島から船で通っています。去年の三月には、待ちに待った大島架橋が完成しました。しかし開通は来年の三月末の予定らしいですが、道路の整備等遅れる見込みだそうです。島民としては、1日でも早い開通を願わずにはられません。そんな折、島民よりも早く渡ったものがありました。それは、動物です。その中に新聞で報道されている親子熊もいたのでしょうか。人間以上に熊も待ち望んでいるのかと思いました。完成を心待ちにしていた反面、危機感を感じています。

さて、毎日大島と気仙沼を船で通って良いこともたくさんあります。それは、昨年大島の栈橋でツバメが飛んでいるのを目にしました。なぜこんな場所を飛んでいるのか不思議な思いをしたのですが、なんと浮き栈橋の下に巣を作っていたのでした。それから毎日そのツバメを見ることを楽しみに通勤していました。雛もだいぶ大きくなり親が巣から飛んでいる回数も増えていきました。風の日も、雨の日も子育てに一生懸命でした。そして無事に雛も大きくなり巣立っていきました。今年の上旬、栈橋を見ているとツバメが飛んでいました。よく見てみるとツバメがまた栈橋の下に巣を作っていました。

話しは変わりますが長野県に「孝行猿」という民話があります。「生きたえし親を生かさんと、かわるがわる傷をあたたむる三匹の小猿……」という内容です。話は以下のとおりです。日本昔話にもあるので御存じの方も多いと思いますが紹介いたします。

昔、信州の上伊那(かみいな)のある山奥に勘助(かんすけ)という猟師がいました。勘助は、妻に先立たれ、一人息子の与三松(よそまつ)を大切に育てておりました。

猟師と言っても冬の間だけであって、普段は畑仕事をしていました。ある年、早(ひでり)がおこり、畑の作物が残らず枯れてしまいました。勘助は、育ち盛りの与三松のためにも早く冬になって猟ができるのを心待ちにしていました。

そして冬になり、はやる気持ちを抑えきれず、夜明けを待たずに猟に出かけました。ところが獲物がどこにもおらず、必死で山の中を歩き続けていると、一匹の猿が木の間で吹雪から身を守るようにうずくまっているのを見つけました。

普段は猿など捕らない勘助でしたが、この時ばかりは猿を撃ち落としました。持ち帰った猿は、その日のうちに食べるとあたってしまうので、空腹を我慢して肉が硬くなってしまわないように囲炉裏の上の「ひだな」にのせてその日は、与三松とともに早く床に入りました。

それから、どれほど時がたったころか、囲炉裏のある部屋で何やら物音がして勘助は目を覚ました。こっそり覗くと、三匹の子猿が囲炉裏の鉤に登ったり降りたりしているのです。よくよく見ていると、子猿は囲炉裏の残り火に手をかざして温め、鉤に登ってひだなの上に乗せられている死んだ母猿の傷口を温めて生き返らせようとしているのでした。

それを見た勘助は、寝ている息子を振り返り、子猿達から母親を奪ってしまった罪の重さにいたたまれなくなりました。夜が明けてから勘助は、神棚に猟銃を荒縄で縛って置き、「二度と猟はしない」と固く誓いました。

親子の絆はどこで生まれるのか「ツバメの子育て」や「孝行猿」から感じたことでした。

